

成田空港で自動物流道路実験

■新技術実装に向けた第一歩に

成田国際空港で自動物流道路の実装に向けた実証実験が開始された。人手不足といった課題や、物流の生産性向上・効率化などを目的に、空港内外の道路で行うもので、15日には自動カート型搬送機器、自動運転車両、自動トーイングトラクターなどの自動化技術が公開された。成田国際空港は滑走路延伸・増設とそれによる発着容量拡大を踏まえて、貨物施設や旅客ターミナルの再編が計画されている。貨物施設に関しては生産性向上、効率化を追求するとともに、周辺道路ネットワーク・施設との接続性を向上させる方針が示されている。今回の自動物流道路の実証実験は、これら構想を実現するための新技術実装に向けた第一歩となる。

成田国際空港会社（NAA）と千葉県が4月に設立したNRTエリアデザインセンターは、6月に成田空港「エアポートシティ」構想を策定した。構想には自動物流道路（オートフローロード）導入による物流の全体最適化を視野に入れていることが盛り込まれた。

さらにNAAや千葉県、PLIBOT社で構成するグループが、国土交通省の「2025年度自動物流道路の社会実装に向けた実証実験」への参加事業者として採択された。自動物流道路にかかわる取り組みとしては初となる、供用中の道路隣接地での搬送機器の自動走行も行われる。

成田空港内外で12月中旬から2025年度中に実施される実験は県道用地トンネル内、成田空港内道路で行われる。検証内容は▽搬送機器の自動走行＝走行安定性（ゆらぎ・ブレの低減）、加減速性能の最適化、路面状況の影響軽減、屋外走行時のモニタリング方法の確立▽搬送機器の通信安定性＝トンネル内での通信技術の安定化、実際の道路環境での通信影響の把握、データ伝達速度と信頼性の向上——というもの。

協力企業は大林組、PLiBOT、eco ro GmbH、大成建設、大成ロテック、ティアフォー、ナガセテクノサービス、Tracteasy LLC、Cuebus。15日には自動カート型（搬送機器の自動走行、通信の安定性）、自動運転車両



熊谷俊人知事



藤井直樹社長

（通信安定性）、自動トーイングトラクター（搬送機器の自動走行）の紹介が行われるとともに、一部車両で走行実験が行われた。

千葉県やNAAは実証実験を「成田空港での自動物流道路の実装に向け、複数の自動搬送機器の実走実験で走行の安定性や通信の安定性を確認する」ことを目的に掲げている。記念式典で千葉県の熊谷俊人知事は「エアポートシティ構想では、持続可能で安全な、全く新しいカーボンニュートラル型の物流革新プラットフォームを示している」と説明。「成田空港周辺地域が日本のみならず、世界に誇る物流革新のリーディングエリアとなるよう、自動物流道路を展開することが重要だ。さらに将来的には成田空港と羽田空港間の貨物搬送にも対応することが期待される。今回の実証実験は自動物流道路の構築に向けた大きな一歩であり、自動物流道路を大きく育てるために関係者の皆さまからお力添えをいただきたい」と述べた。

NAAの藤井直樹社長は「人手不足という事業環境にある中でも安全・安



自動カート型搬送機器



自動トーイングトラクター



自動運転車両

心な空港運営を可能とすることが非常に重要だ。そういった観点からも自動物流道路は大きなインパクトがある。将来的には成田空港と羽田空港をつなげるような構想もあり、そうした意味でも非常に関心の高い、意義ある施策だ。実証実験で知見を積み重ね、NAAとしても自動物流道路の具体化へ最大限努力していく」と語った。